

■第55回産業技術フォーラムの開催結果

(鶴岡高専校長 森 政之)

【はじめに】

第55回産業技術フォーラム(主催 鶴岡高専、技術振興会)は、「学びの空間/歴史的な街の再生」を全体テーマとして、12月7日(火)にマリカ市民ホールにて約50名の来場者をお迎えし、また約20名のオンライン参加も得て、和やかに開催されました。以下、基調講演及びパネルディスカッションの概要について報告いたします。

なお、基調講演は川添善行先生(東京大学生産技術研究所准教授)により、パネルディスカッションは川添先生、秋野公子先生(秋野建築設計事務所代表)、秋山祥一先生(秋山鉄工代表取締役)の3名により行われ、司会は筆者が務めました。



写真1 会場の様子 ©鶴岡高専

【第一部 基調講演】『建築のできること』川添准教授

大学での教育と併行して建築家として建築の仕事やまちづくりに取り組んでいます。今日は、『建築のできること』をテーマとして、かい摘んで話をしたいと思います。

今、低人口密度の研究に取り組んでいます。例えば一平方キロ当たりの人口が五千人を超えるとインフラコストが下がると言われます。人口集中の悪い側面にも目を向け、一方で低人口密度の良い面を明らかにしたいと思います。

建物と建築の違いは、Building と Architecture の違いとも言え、Architecture は複数形が無く抽象名詞で

あり思考や概念として捉えられます。

個と全体についても話をしたいと思います。建築には個人のための建築と社会のための建築がありますが、最近では個人のための建築が増え過ぎていると感じています。社会のための建築の特徴は、社会の役に立って長持ちすること、場所性を刻んだり可視化したりすること、時間の厚みを継承すること、などです。

今は世界が横に繋がる時代であり、場所性を見直しと他との差異化が果てしなく競争を生み、「〇〇らしさ」を持つことに不必要な強迫概念があるように思います。

場所性については、制約が魅力を生むことにも注意が必要です。建築と場、活動、形式が何世代にもわたって影響を及ぼし合って建築の魅力も生まれます。

続いて、竹富島の例から、制約がもたらした街の魅力や機能性について説明したいと思います。竹富島の街並みはデザイナーによるものではありませんが、そのどこを変えても現状以上の暑さ対策にはならないことがシミュレーションにより明らかとなりました。

和歌山市加太地区の街づくりについても説明したいと思います。当初、国のプロジェクトで関わるようになりましたが、数年経っても上手く結果がでませんでした。予定した協力活動が終わったので、その旨を市長に報告に行ったところ、市長から延長を頼まれ、三年だけ続けてみることにしました。その後、これまで関わっていた市の観光チームに加え、都市計画チームも関わるようになり、横断的な体制で仕事ができるようになりました。加えて、加太の東大サテライトオフィスに市の職員も研究員として常駐するようになり、さらに東大の海洋研など他の分野の研究者も加わり、拠点として充実していきました。夏には Summer Science Camp を開催するようになり、全国から中高生を集め、また各分野一流の専門家を招聘し、和歌山大学の協力も得て街歩きや討論会を行えるようになりました。延長を決めた時点で3年だけとの約束であったので、東大が去った後もフォローアップできるよう行政と一緒に取り組みました。

福井県坂井市の東尋坊地域の街づくりにも関わっており、人のつながりの構築に取り組んでいます。人のつながりには、場所とイベントの両方が必要であり、一時的でも構わないので人々を呼び込む必要があります。

す。街のガイドラインづくりにも協力していますが、デザインコードではなく、活動に焦点を当てています。

鶴岡高専の学生にとっても、鶴岡の街について深く知ることで、街に興味を持つことにつながり、将来地域に貢献する人材を育てることに繋がると思います。



写真2 基調講演（川添善行 東大准教授）の様子
©鶴岡高専

【第二部 パネルディスカッション】

冒頭に、筆者よりフォーラム及びパネルディスカッションの趣旨について説明しました。その中で、現在鶴岡高専キャンパスで取り組んでいる活動、すなわち学習者の視点から学習環境をデザインする試みは、住民の視点から街づくりを考える試みと相通じるものがあると考えられ、特に、今後は街づくりとの連携を図りたいとの旨を述べました。

また、趣旨説明に続き、秋野先生、秋山先生より自己紹介をいただきました。

【討論① コロナ禍で起こった「学び」の変化】

（司会）学びの空間について本日議論する上で、コロナ禍での変化について触れる必要があります。また、社会一般の変化も含めて議論することも有効かもしれません。

（川添）東大の授業の変化ということでは、オンラインで受講生数が例えば30名から100名に増えるなど、大幅に増えたことが掲げられます。自分の授業だけが特別に人気となった、のとは違いますが。オンラインは効率的ではありますが、学生同士が一緒に考えるという場面が生まれにくい点は指摘できます。

（秋山）行動が内向きとなり海外に目を向けなくなることが気掛かりです。社会人として成長していく上でも行動力は不可欠です。

（秋野）オンラインを身近なものと感じられるようになった今、市内の色々な場所で勉強していた学生がオンラインの活用で更に場所も繋がり一緒に勉強出来るという環境になるといいと思います。

【討論② 「学び」の変化も踏まえ、鶴岡高専で実践すべきこと】

（司会）先ほど鶴岡高専での学習環境改善の状況について説明がありましたが、コロナ禍での変化も踏まえ、今後の実践の在り方についてご意見をお願いします。

（秋野）高専生がキャンパス内だけでの生活とならず市民と学問や技術の交流が持てる高専生の居る場があるといいと思います。市街地に高専の活動拠点を設けたらどうでしょうか。

（川添）鶴岡高専の拠点を市街地、特に駅前に確保してはどうでしょうか。そこで街づくりに関連した教育を行っていくことは有効ではないかと考えます。

（秋山）秋山鉄工では、長年、子供たちに向けた発明教室の開催・運営に支援を行ってきています。人づくりが街づくりの要諦であり、鶴岡高専も技術で社会に貢献する人材の育成に取り組んでいただきたいと思います。また、伝える力は重要であり、英語力に加えて、母国語で正確に使えられるよう取り組んでいただきたいと思います。

【討論③ 「街づくり」との連携に期待すること】

（司会）すでに連携の必要性についていくつかご指摘をいただいておりますが、あらためて連携への期待についてご意見をお願いします。

（川添）鶴岡高専の役割は、技術者教育を行う機関としての特性を生かし、その獲得した技術を街づくり、街の発展につないでいく人材を育てていくことではないでしょうか。

（秋山）鶴岡高専が地元の企業と一緒に社会的課題について考え、今後社会に変化を起こしていくことに期待します。

（秋野）高専生も学べて大人も学べる場があることが

いいと思います。建築士としての役割はそれを繋ぐ場の提供に留まらず活用のプログラム作りまでだと思います。本当の意味のコミュニティアーキテクトになればいいと思います。川添先生のご講演にあった市民が投函できる「こんな風になったらいいな箱」が欲しいところです。それと IT 革命で線が引かれた技術や技術の伝承方法も学びあえたらいいと思います。

【討論のまとめ】

(司会) 短い時間ではありましたが、パネリストの皆様から、多くの貴重な意見をいただきました。今後、鶴岡高専としても、高等教育機関として地域に貢献する人材の育成に努め、これまで以上に街づくりとの連携を意識して高専キャンパスの環境改善を図っていきたいと思います。本日はご参加いただき、ありがとうございました。



写真3 パネルディスカッションの様子
(右より川添先生、秋野先生、秋山先生、筆者)

©鶴岡高専